

決算報告にみるコロナ禍の影響 解説資料



# 巢ごもり効果 任天堂最高益

任天堂が6日発表した2021年3月期決算は、売上高が前年比34・4%増の1兆7589億円・純利益が同55・7%増の4800億円だった。ゲーム機の「ニンテンドースイッチ」や、人気ソフト「あつまれどうぶつの森」の販売が好調で、営業利益と純利益は過去最高だった。

昨年3月末に発売した「あつ森」は21年3月期に205万本が売れる、販売累計は3263万本に達した。ソフトの人気を受けてゲーム機本体のスイッチの販売台数も伸び、前年比37・1%増の2883万台。全体の売上高は09年3月期に次ぐ高水準となった。古川伊太郎社長はこの日の会見で、「例年（20年4～9月期）は例のない規模で推移した」と話した。

新型コロナウイルスの感染拡大による「異色もあり」で、「ゲーム機で人々に遊びお客様が増えた」（古川社長）という。ソフトのダウンロード販売やオンラインサービスの会員料について、「デジタル売上高」も前年比で7割近く増え、3441億円だった。

ただ、こうした追い風は一過性の面もあるとして、22年3月期の業績予想は売上高1兆6千億円・純利益2兆5千億円減収益を見込んでいる。

スイッチは販売開始から5年目を迎えた。過去のゲーム機に比べると、時間が経つても堅調な売れ行きといふ。22年3月期の販売台数は前年比約1割減の25万台を見通す。新型機に関する古川社長は、「現時点で申し上げられることははない」とだけ述べた。

一方で、半導体不足がゲーム機の製造に影響するおそれも出てきた。古川社長は「想定以上の需要があり、世界的な半導体部材の需給逼迫がある」とつづり、「いたい数をすべてつくれる状況ではない」と説明。今後の生産に遅れが生じる可能性も示唆した。

21年3月期はゲーム業界の好調さが目立つ。昨秋からフレイムソード5などを発売し、ソニー・クループは、ゲーム事業の売上高が前年に比べて67.8億円増えた。10日に決算を発表予定のカブコーンは営業利益30

スイッチ好調 3月期4800億円

三

※朝日新聞 2021年5月7日 承諾番号「23-2317」  
教材は発行者の責任のもと、本文の一部を赤字にしています。  
朝日新聞社に無断で転載することを禁じる。

# 用語解説

- ・「**2021年3ヶ月期決算**」は2020年4月1日～2021年3月31日の1年間を会計期間とする決算のこと。会計期間の期末をいつにするかは企業によって異なるが、日本の企業では3月末が多い。
  - ・「**売上高**」は商品やサービスを売って顧客から得た対価の総額のこと。そこから売上原価と販管費（販売費及び一般管理費）を差し引いたものを「**営業利益**」といい、その企業の本業でのもうけを意味する。
  - ・総収益と総費用との差額を「**純損益**」といい、これが総収益>総費用の場合に「**純利益**」が生じる（逆の場合は「**純損失**」）。純利益は、臨時に発生した特別損益や税金なども差し引いた最終的なもうけを意味する。

## 記事の着眼点

- ・コロナ禍は経済活動に深刻な影響を及ぼしたが、いわゆる「巣ごもり需要」を取り込んで、業績が好調だった企業もある。その代表例が家庭用ゲームを扱う業界であり、なかでも任天堂は純利益が前年比+85.7%で過去最高を記録した。
  - ・売上高だけでなく、利益（営業利益や純利益）に着目している。記事中の任天堂の場合、ゲーム機やソフトの販売が好調で売上高が増加した（前年比+34.4%）ことに加え、ソフトのダウンロード販売やオンラインサービスなどのデジタル売上高が大きく増加したことが重要である。たとえばゲームソフトを考えると、物理的なモノであるパッケージ版では製造に要する部品や販売店までの運送などに費用がかかる。これに対してダウンロード版では、デジタル決済の手数料など特有の費用があるものの、製造や運送などの費用が大きく抑えられ、利益率（売上に占める利益の割合）が高い傾向がある。デジタル売上高の増加は、営業利益や純利益の大幅な増加につながったと考えられる。